

モンシロチョウやアゲハチョウについて皆さんがよく目にしているキチョウの紹介です。このキチョウは東北を北限として八重山諸島まで広く分布しますが、1992年に八重山地方のキチョウとは種として区別できるわずかな違いのあることがわかって、八重山産をキチョウ（別名ミナミキチョウ）、それより北に分布するキチョウをキタキチョウと呼ぶことになりました。このキタキチョウについては、ごく普通種でありながら、まだまだ解明できていないことがたくさんある、実に興味深いチョウです。例えば、東北地方では青森県でも発見されますが、青森県下で定常的に発生している確証はなく、もっと南の地域で発生して迷い込んだ迷チョウ（その地域では発生していないチョウがたまたま迷い込む場合の呼び方）か、メスの迷チョウが生んだ卵からの一時的な発生だと考えられ、真相解明はされていません。キタキチョウは、春型、春夏中間型（稀）、夏型、夏秋中間型、秋型、晩秋型と、最も多くの季節変異を示しますが、2008年に季節変異型にこだわって作製した実際の標本写真を示します。翅表の黒い鱗粉がだんだん薄く



なってゆく変化が明らかで、まさに、百聞は一見にしかず。初秋型と秋型は大差がありません。春から夏への移行タイプ：春夏中間型は2009年に注力して何とか標本を追加できました。実は、このキチョウの季節変異については、中学時代の恩師である理科担当の先生

から「チョウの標本をただ並べるだけでは研究とはいえない。ごく普通種のキチョウに関してもわかっていないことがいっぱいある。そういう視点でチョウたちと接しなさい」と諭されたことがあり、その後、チョウの生態研究が私のライフワークとなりました。写真に示した標本記録中面白いのは、10月13日、加古川市志方町の同一場所・同時刻に、準夏型、夏秋中間型、そして初秋型が混在していたことです。翅表の黒い鱗粉の発達度は、幼虫時代の日照時間、気温などの影響が大きいと考えられますが、全く同じ地域で同じ時期に育ったはずのチョウが3種類の季節型として発生している事実は、なんと説明していいのかわかりません。なお、あえて準夏型だと区別したのは Sep.9,2008 の夏型と比べれば前翅黒鱗粉の発達度に明確な差があることで納得していただけるでしょう。この夏型前翅の黄色部分に注目すると、ある種の犬の横顔に似ていますよね。アメリカには目玉模様まである Dogface と呼ばれるモンキチョウの仲間がいて切手にもなっているのでモンキチョウの項で紹介します。Apr.5,2008 の標本が晩秋型となっているのは、このキタキチョウはチョウのまま越冬して、晩秋に発生した個体が暖くなった春先から再び活動を始めた結果です。越冬母チョウが産卵をして育った第一化発生個体が5月頃からみられ、その中に春夏中間型が混じります。キタキチョウはハギ類、ネムノキ、クサネム、ニセアカシアなどの葉っぱや花を食エサとして育ちます。松波町周辺では、ヌスビトハギなどで発生しています。2008年、志方町の水田横に自生しているクサネムで産卵場面に出くわし、持ち帰って飼育した際の羽化直前の蛹と羽化後のキタキチョウの写真を示します。2009年3月西畑花畑では暖かくなってもなかなかチョウが飛びませんでしたが、ようやく18日、越冬後のキタキチョウが目覚まして遊んでいました。



のキタキチョウの写真を示します。2009年3月西畑花畑では暖かくなってもなかなかチョウが飛びませんでしたが、ようやく18日、越冬後のキタキチョウが目覚まして遊んでいました。

